

國學院大學学術情報リポジトリ

コメント二

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿部, 晃成 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001051

《コメント二》



阿部 晃 成

地元の復興

ご紹介にあずかりました阿部晃成と申します。宜しくお願い致します。
私は宮城県石巻市雄勝町出身で、東日本大震災当日は地元にいました。

東日本大震災前の宮城県の津波想定ハザードマップでは、私の家は海沿いだったこともあり、危険を示す赤でした。つまり、震災前想定は津波が来た場合でも、家は流されてしまうということです。そのため、震災以前から家族の中で相談をしております。「津波が来たら家と倉庫は諦めて避難しよう」ということを決めていました。実際、地震が起きた時は、震災前からの取り決めに従って、親父が音頭を取り、震災前の宮城県沖地震で発生する津波の想定浸水域よりも高い場所に逃げました。避難先候補は、地区内で百段ぐらいの階段を登れば助かる中央団地、車で避難することができる雄勝の森林公園もしくは

は地区内の奥まった場所のいずれかという話になり、車で避難できる地区内の場所を選びました。しかし、今回の津波は結局、避難させていただいたお宅まで津波が到達してしまい、二階まで逃げ込んだものの、逃げた家が津波に持つていかれ、上が八十三歳の祖母から高校生の弟の一家七人でその晩から漂流するという経験をしました。奇跡的に誰も欠けることなく助かり、その後、地域の復興に関わりました。

震災以前、私の地元には六三〇世帯ありましたが、そのうち六〇〇世帯が流出・全損しています。そのため、壊滅状態の中で復興事業が進んでおります。平成二十九（二〇一七）年十二月には地元で私も入る場所でもあります最後の高台移転地が完成しました。現在、私の地元では戻ってくる世帯数はおよそ五十世帯、八パーセントほどです。私ですが、自立再建の方々と、まだ再建をしていない方々もいます。実質、四十世帯程しか戻らないと思います。私が高台移転する所も当初は三十世帯でしたが、三世帯減り二十七世帯になりました。そのため、私からすると復興は失敗した地域です。津波で流されただけであれば、どうにかなったと思いますが、復興政策により地域の根幹が崩れ、また復興政策によって、トドメを刺された地域だと思っています。

復興とお祭り

『共存学ブックレット2』で滝澤先生が紹介している各地域のお話は、かなりリアリティーがあります。お祭りを復活したのはいいけれど、ボランティアを呼んで地域の祭りを行うという話です。私の地元の名振地区では、毎年一月二十四日に木で掘った男性器の形をした御神体を担ぎ、子孫繁栄を祈り、寸劇を行うという奇祭がありますが、人員が足りないのでお祭りを行うことが出来ず、地元紙にボランティア募集の記事を載せたりしている状態です。それでも地元のお祭りなのかと言われると、甚だ疑問符が付いてしまいます。地元の人でさえ疑問符が付いていますが、

「無くなるよりはマシだけでも」という雰囲気です。

今、私は三十キロほど内陸に入った小船越に住んでいます。そこでのお祭りには法印神楽もなければ、太鼓もありません。神輿はありますが、太鼓も叩かないということで、元々は当然のようにあった事柄が、内陸に移った時に当然のように無くなっています。

震災前に地元でお祭りがあったとしたら、自分が見に行くのは当たり前でした。自分がお祭りを見ていると、場合によっては太鼓を叩くように言われ、鉢を渡されて、太鼓を叩くというのは当然のことでしたが、内陸に移った後、そのようなやり取りは無くなりました。それは、地元の雄勝町でも無くなりました。

被災地の復興と生活再建

今回の発表の中でも触れられておりませんが、基本的に被災地であるという話をする時に、本当に被災地の復興の話になります。雄勝で言いましたら、雄勝町の復興の話になってしまいます。雄勝町の中心部六集落で六三〇世帯ありましたが、九割が出て行く状態になった時に、被災地の復興だけをされても、「んー、まあね」というのが正直な実感です。例えば、他の地域に離れていく理由は、離れた人たちが最初から被災地の復興に加われず、地域には存在していない扱いをされるためです。これは、かなり重要な問題です。

私は、現地再建をして、津波が上がった場所も再利用して、早く戻る形にしてくれないと、私たちは戻れないんだ、といって住民活動をしたが、全く認められなかったために出て行かざるを得なかったと思っています。そういう人にとって、被災地の復興という話をする時に、本当に被災地の復興、雄勝だったら雄勝にいる人、戻ってくる人だけという単位で調査や研究をされると、正直な感情としては苦しいです。今、小船越に住んでいて、やっと高台

が出来たことで戻れる環境が整いましたが、それまでの間は出て行っているという話です。

私にとって、被災地の復興、雄勝の復興、自分の住んでいた集落の復興が何かと言ったら、そこに住んでいた人たちが生活再建をきちんと出来るかどうかです。そのため、地域コミュニティの話になった時に、この調査対象からは抜けている人たちがかなりいます。雄勝では、九割が抜けている状態ですので、そこを皆さんに見ていただけると有り難いと感じます。基本的には、何の調査でもそうですが、例えば、メディアが「地域のお祭りが復興しました」と言ってくるんですが、地元に戻って来ている人しか参加していない異常さというものを私は感じています。震災前であれば、笛を吹く人、太鼓を叩く人を五人で回したりしていたのに、地元の人がほとんどなくなっています。別に三十キロぐらい内陸に皆さんがいらっしゃるわけですが、「皆さん、やつべし」という話が言い出せない。お祭りに参加している人は、「だって、あの人たち出て行っちゃ」という表現をします。このような形を誰が作ったかという話ですが、私は「絆」という言葉をキーワードにして、研究者やメディア関係の人たちがその被災地の中にいる人しか捉えず、出ていった人たちのことは捉えないということを続けていった結果なのかなと思います。

熊本地震の被災地に行った時のことですが、ある集落で、大きな地盤災害があった地域の復興計画のときに、地区会長さんが「皆が同意してくれないと、もう戻れないんだ。何がなんでも戻ってくれ」と一軒一軒頭を下げて、その話に乗ってくる人が少ない、という話を聞きました。それは当たり前なんです。いつてしまえば、そこに住んでいた人たちが全員に必ず戻れということは、強制できるものではありません。しかし、メディアの捉え方は戻らない人として扱っています。こんなに頑張っ、引き止めているのに戻ってくれない、このように報道されたのを見たら、出ていく方は相当苦しい思いをしながら見ていると思います。私なんかも、体の半身以上は三十キロ内陸の小船越に行っており、雄勝には通いでしか行っていない。

被災地の復興がしたいのか、被災者の支援がしたいのか、皆さんは被災地の復興が被災者の支援に繋がると考えていると思いますが、実質、今回の震災復興で、それが一〇〇パーセントカバーできているかというと、出来ていません。雄勝で言うとうれ割をカバーできていない状態があると思います。

良い防潮堤・悪い防潮堤

防潮堤いわゆるグレイインフラという話ですが、雄勝の防潮堤は元々三・七メートルでしたが、現在建設中の防潮堤は九・八メートルになります。実際に出来てみると、「これはスゴイな」と圧倒される感じです。しかし、防潮堤が必ずしも一〇〇パーセント悪いものかという点、そんなに悪いものではない可能性もあります。防潮堤の良い悪いというのは、そこに住んでいる人に対して、「この防潮堤って、どうなんですかね」と話を聞いた時に、その防潮堤についてきちんと語れるかどうかだと思います。例えば、「うちらは、これが必要だと思って建てたんだ」「L1（数十年から百数十年に一回発生する津波）だから、地震が発生したら過信せずに高台に避難しなきゃいけないんだ」というような所は、良い防潮堤だと思います。一方、「この防潮堤があるから大丈夫だ」「こんなのいらない」と言っている住民が多い所は、悪い防潮堤だと思います。グレイインフラがいいのか、原型復旧ぐらいがいいのか、壊されたままにしたい方がいいのか、ということとは、そこに住む人たちが決めることなのかなと思います。